

# 「伝統的な言語文化」をどう考えるか

—無常観の系譜—

柴田 哲谷  
愛知学泉大学

## A study of about “Item related to traditional linguistic culture” The genealogy of “MUJOUKAN”

Tetsuya Shibata

キーワード：伝統的な言語文化 Item related to traditional linguistic culture、無常観の変化 Changes of “MUJOUKAN”、方丈記と徒然草 “HOJOUKI” and “TSUREZUREGUSA”

### 1. はじめに

国語科学習指導要領は、小中高（国語総合）を通じて、「話す・聞く」「書く」「読む」の3領域と併せて「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の項目を設けている。ここに言う「伝統的な言語文化」とは、小学校では昔話・神話・伝承（1・2年）、ことわざ・慣用句・故事成語（3・4年）、親しみやすい古文や漢文・近代以降の文語調の文章（5・6年）を、中学校では古文・漢文を指す。これらを学ぶ意義は何であるべきか。

ある時代に書かれたある作品の内容や作者の理解に終始するなら、脈絡のない知識の集積を学習者に強いることになろう。また、作品の価値やそれを持ち得たことを単に称揚するなら、偏狭なナショナリズムを呼び起こすかもしれない。

古典とは、現代から遠く隔たったどこかに離島のように在るものの謂いではない。古代から生成し続けた数限りない作品は成立年代を異にしつつ、それぞれの背景を伴って繋がり、（日常言語や所作・慣習にも似て、）分岐や曲折を経つつ、現代に達しているのではないか。ならば、古典を学ぶことは現代を知ることである。

そこで、授業において古典作品を他の作品との連関において眺める、時間の流れの中に置いて眺める仕方を提唱したい。例えば、高校の古典授業で無常観を切り口にいくつかの作品を吟味することは、それぞれの理解を深めると共に、私たちの感性や思考

様式を考えるヒントともなるだろう。

無常観と言うとき、日本人の多くは「平家物語」と「方丈記」の冒頭を思い浮かべると思う。「祇園精舎の鐘の聲」と「ゆく川の流れ」は、それほどに人口に膾炙してきた。平安末の争乱と天変地異は末法思想の流布とも相俟って、世の中を「常なし」と慨嘆せざるを得ないような淵へ追い込んだかもしれない。しかし、そうした無常の意識は俄に出現したのではなく、個別の人生の深みにおいて、そここで醸成されていたはずである。

ここでは、「万葉集」「古今和歌集」のいくつかの歌に無常意識の萌芽を確認し、「平家物語」に触れつつ、「方丈記」と「徒然草」における無常観を吟味する。そして、（作者の個性はとりあえず措くとして、）120年という両者の成立年の隔たりが無常観にどのような質的变化をもたらしたのかを見ることにする。つまり、無常観を軸として時間の流れの中に作品を置いて眺めることで、「伝統的な言語文化」の授業の可能性を拓こうとするのである。（本稿では、論旨の性質上、無常観の視点で古典作品を網羅的に見たり、研究史を詳細に吟味したりはしない。）

### 2. 「万葉集」「古今和歌集」「平家物語」に見る無常意識・無常観

#### (1) 「万葉集」の場合

太宰の帥であった大伴旅人は「凶問」（凶事の知らせ）に際し、次のように詠んだ。

世間は 空しきものと 知る時し いよいよます  
ます 悲しかりけり 793

詞書に「禍故重畳し、凶問累集す」とあり、妻を失った旅人がさらなる不幸に見舞われて詠んだとされる。井村哲夫は、

初二句「世間は 空しきもの」という命題は、諸法皆空、すなわちいっさいの存在は因縁によって生滅変転するもので、それ自体に常住不変の本体はないという考え方である。<sup>1)</sup>

と説明している。目前の死を悼む挽歌とは少し違って、旅人は死に遭遇せざるを得ない人間の定めに思いを致し、その空しさを見つめて詠嘆したものと考えられる。つまり、人事の空しさを対象化している。

山上憶良の長歌「貧窮問答歌」に添えられた短歌は、同歌に示されるごとき現実に生きざるを得ない人間のありようを詠嘆している。

世間を 憂しと恥しと 思へども 飛び立ちかね  
つ 鳥にしあらねば 893

井村は「憂しと恥し」について、「何の因果か諸々の苦患の海に沈没して、あがきもがきしている人生をおしなべて言う感想」であるが、また、「厭世気分でも悲惨でもなく、むしろボロをまといながらも生き生きと血のかよった貧者群像への感動<sup>2)</sup>」を覚えてもいると言う。なるほどこれは、「貧窮問答歌」の中の「我を除きて 人はあらじと」とも照応するのかもしれない。しかしまた、この一首は、貧者たち—あるいは作者自身—の生活と思いに寄り添うものであると同時にそのような世をつくっている自分ら官人の無力さへの慨嘆とも読める。統治する側にいながら目前の惨状を如何ともしがたいこと、また、そういうわが身が辛いのだ。

旅人や憶良の思いは、人事を自然に対置して「常無し」と見たのではないが、世の中に生きる人間のどうしようもない悲しさ・空しさを対象化している点に無常意識の萌しを見出すことができる。

大伴家持が天平勝宝5年(753)春に詠んだ3首は、秀歌として名高い。

春の野に 霞たなびき うら悲し この夕かげに  
鶯鳴くも 4290

わが屋戸の いささ群竹 吹く風の 音のかそけき  
この夕かも 4291

うらうらに 照れる春日に 雲雀あがり 情悲し  
も 独りし思へば 4292

春の夕暮れを「うら悲し」と見、庭前の群竹を通

る微風を「かそけき」音と聞き、うらかな春の情景の中で「情悲しも」と慨嘆する心性は、人間の空しさを探り当てていると見てよからう。橋本達雄は、これらを、初めて春愁を歌ったもので「繊細な心のかげり」を表現し得ている(4290)、「孤独な哀韻を細々と漂わせ、人生そのもののさびしさを表しているような深さをたたえている」(4291)、「人間の存在そのものが独りだと自覚する言いようのないさびしさ」が歌われている(4292)<sup>3)</sup>と評している。眼前の景によって呼び起こされた感情を対象化し、人間存在のさびしさや空しさに思い至る感性は無常意識に通じる。

## (2)「古今和歌集」の場合

巻18雑歌下に「題しらず、読人しらず」として載る933は直截に無常を歌っている。

世の中はなにかつねなるあすか川きのふのふち  
ぞけふはせになる 933

窪田章一郎は次のように解説している。

無常観を詠んだ歌として愛誦され、有名である。「世の中」という語は、恋愛歌では男女の仲をいうが、この巻では人生の相を広くとらえる語となっている。仏教が滲透し、万葉時代とは比較にならないほどに一般化したのが、大きな特色である。<sup>4)</sup>

仏教の無常観は、法印(仏法の特徴)の一つである「諸行無常」として、「すべての現象は一瞬の停止もなく、無常にして生滅変化する<sup>5)</sup>」と説明されている。無常とは、

一切万物が生滅変転して、常住でないこと。現世におけるすべてのものが速やかに移り変わって、暫時も同じ状態にとどまらないこと。特に、生命のはかないこと<sup>6)</sup>

である。これは、生きていく中でほとんど誰もが実感するだろう。しかし、時代を覆う思想として当時の人々の心に染みこんでいたわけではない。

上の歌は無常への慨嘆にとどまっている。ただ、無常意識が例えば生活苦にある人々などに広く共有されていたことは、「題しらず、読人しらず」という詞書からも理解できる。同じ巻の、

山里はもののわびしきことこそあれ世のうきよりは  
住みよかりけり 944

には、そうした世の中への絶望が見られる。また、うつせみの世にもにたるか花ざくらさくと見し

まにかつちりにけり 73

は、現世を空しいものと見る意識がある程度一般化していたことをうかがわせる。ままならぬ生活や人生を、この世は無常であると言葉に出して嘆くことによって受けとめていたと考えられる。

### (3) 「平家物語」の無常観

「祇園精舎」以下の冒頭は、この物語がまさに無常を説くものであると宣言しているように読める。たしかに「敦盛最期」も「大原御幸」も、読む（聴く）者に世の無常を感じさせずにはおかない。しかし、各エピソードが「観」＝思想を導くものとして配置されているかという点、そうとも言い切れない。かつて、小林秀雄は「一種の哀調は、この作の叙事詩としての驚くべき純粋さから来るのであって、仏教思想という様なものから来るのではない<sup>7)</sup>」と断じた。石母田正も次のように警告する。

平家物語といえば、盛者必衰・会者定離の思想を述べた物語であるとかんがえられている。このことは一面では真実である。しかし、まるで無常観や、宿命論がありさえすれば平家物語ができるように錯覚されると、平家物語の他の側面、あるいはその本質がどこかに見うしなわれてしまう。／無常観その他の平家物語の思想はもちろん平家の作者だけのものではない。それはこの時代の広汎な人々の考え方であった。<sup>8)</sup>

ここに言う、人々に共有された「思想」は、対象の分析と総合を経て抽象され、記述された思想という意味ではなく、人々が世のありさまを見て抱いた実感と言うべきものであろう。ただ、それは強烈であった。藤井貞和は、この時代をこう説明する。

日本の思弁的伝統は儒学を相対的にとらえて撰取するタイプの仏教的流れのうちに、次第に育成されてゆく。現実社会の闘争や否定的な圧力とそれを無常と見て逃れたくも思う（いや、逃れてはならぬという、現世肯定的、葛藤的な）心情のうちに、思想らしさが切実さの度を増す。<sup>9)</sup>

この流れに沿って鴨長明があり、流れの先に兼好法師がいた。

## 3. 「方丈記」と「徒然草」の無常観

### (1) 長明と兼好

鴨長明と兼好法師には共通点が多い。長明は 1155

年、下鴨神社の神職の家に生まれた。従五位下に叙されるも河合社禰宜への望みを絶たれて出家し、後に日野山に閑居する。歌を源俊恵に学び、歌合わせなどで活躍した。「千載集」にも入集し、1201年に和歌所寄人となる。琵琶も能くした。「方丈記」は1212年に成立。歌論書の「無名抄」、仏教説話を集めた「発心集」を著し、私家集に「鴨長明集」がある。1216年に没した。

兼好はやはり神職の家に、1283年ごろ生まれたとされる。堀川家の家司となり、1301年後二条天皇即位の折、六位蔵人に任ぜられる。従五位下左兵衛佐に昇進後、30歳前後に出家した。それについて久保田淳は、堀川家につながる後二条天皇の早世が無関係ではないとしつつも、「おそらく、ごく普通の官人生活を送るうちに、徐々にきざした無常の観念が、ついに卜部兼好を出家へと駆り立てたのであろう<sup>10)</sup>」と推測し、その間の煩悶を家集に見出している。

世をそむかんとおもひたちしころ、秋のゆふぐれに／そむきな（て）はいかなるかたにながめまし秋のゆふべもうき世にぞうき（三四）<sup>11)</sup>

出家後、関東へ下りもしたが、帰京後は双ヶ岡の麓に閑居し、貴族や武士、僧侶などと交わった。和歌は二条為世に学び、門下の四天王とも言われた。「続千載集」などに入集。「徒然草」は、1330年ごろに成立か。九州探題の今川了俊との親交もあった。没年は1352年頃と言われるが定かでない。また、出自には異論が出ている。

長明と兼好は、神職という出自、和歌の上手、そして隠棲者であったことが共通する。しかしながら、同時代人ではない。長明の生誕から「方丈記」成立まで、すなわち1155年から1212年の間には、保元の乱（1156）、平治の乱（1159）、平清盛太政大臣就任（1167）、安元の大火（1177）、治承の辻風、源頼政・以仁王の挙兵と敗死、福原遷都、源頼朝・木曾義仲挙兵（1180）、養和の大飢饉（1181）、平氏滅亡、元暦の大地震（1185）、奥州平定（1189）、頼朝征夷大將軍就任（1192）、頼朝死去・頼家將軍就任（1199）、源実朝將軍就任（1203）、北条時政の源頼家殺害（1204）といったことが起こっている。人事においても自然においても凄まじい。かかる世から、念仏による極楽往生を説く浄土宗が興ってもいる。

一方、兼好誕生から「徒然草」成立まで、すなわち1283年から1330年の間に起こったのは、蒙古襲来（1274、1281）の影響による徳政令（1297）の

発布、後醍醐天皇の親政（1321）と倒幕計画（1324、正中の変、1331、元弘の変）といったことどもであり、やがて鎌倉幕府は滅び（1333）、後醍醐天皇が再び親政を始める（建武の新政）。兼好は、政治権力というものが、平氏を倒した源氏、後鳥羽院の蜂起を制圧した北条氏、そして天皇へと移るさまを眼前に見ていた。兼好の意識裡には、権力の主体は移ろうものだという確信が醸成されたに違いない。さらに、弘安4年（1281）の蒙古再来は伝聞として記憶にあったと考えられ、ならば彼は、国家自体の消滅すらあり得ないことではないと考えただろう。民衆に浄土宗・浄土真宗が広まり（39段に法然の逸話あり）、武士が臨済禅を支えとする風潮は、兼好の認識に照応するとも見える。

長明と兼好は異なる時代環境に生きたのであり、そうである以上、それぞれの無常観も同質ではあり得ない。長明は、常住と見えた世の中が大きく変転するさまに衝撃を受け、無常を感じ取った。兼好は、変転する政情を眺めつつ、無常の世に生きる人間のありようを思った。時の流れに置いて眺めることで、彼我の無常観は異なる相貌を見せるはずだ。

## (2) 「方丈記」と「徒然草」の無常観

「方丈記」の作者は、大火・大地震・大火事・飢饉が襲う現実を目の当たりにし、「すべて、世中のありにくく、我が身と栖との、はかなく、徒なるさま、またかくのごとし」と無常を感じる。そして、「いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき」と日野山での閑居に向かう。直面する事態が及ぼす衝撃におののき、閑寂へ身を潜めている。現実としての無常、それに対する直截な反応であり、ここには無常の世にどう向き合うかについての自他に向けてのアイデアはない。言わば無常感である。

「徒然草」ではどうか。久保田淳は、人間のあり方や王朝文化への愛惜などが感覚的に綴られる一方で、世の無常への言及は論理的だと言う。

……世人の迷妄を衝き、無常の道理を述べる段になると、その筆致はにわかに論理的な色彩を帯びてくる。我々はその例を、第三十八段、第九十一段、第九十三段、第一百五十五段、第一百八十八段などに見出すであろう。（中略）無常の理を説き、迷妄からの覚醒をうながすという点では、他者に働きかける説教師にも通ずる姿勢が

ないとは言えないが、しかし作者の物言いは他者よりもむしろ自己に向かって発せられているような口吻も感ぜられる。<sup>12)</sup>

清水正之は「徒然草」の無常は法則だと言う。

「徒然草」の無常とは、世にあるすべてのものの栄枯盛衰であり、不定ながら必ずや誰にでも到来する生老病死である（四九段）。端的には「命を終ふる大事」（一三四段）、即ち死の到来の不定性である。その到来の不定さ自体は普遍的であるがゆえに「変化の理」（七四段）、いわば法則として受け止めるべきものである。<sup>13)</sup>

西尾実は、「平家物語」や「方丈記」が悲哀感情としての無常観、つまり詠嘆的無常観を出していないのに対して「徒然草」は自覚的無常観に達していると言ひ、両者の差異を次のようにまとめた。

「つれづれ草」文学は、作者の生活感情としての無常観を焦点としたものであると言ってきたわたしは、ここに至って、その焦点である無常観に、推移、いわば詠嘆的無常観から自覚的無常観へとでもいうようなものがあるということを確認ざるを得なくなっている。しかも、この詠嘆的無常観から自覚的無常観への深まりは、まさに、鎌倉時代初期における「方丈記」から、鎌倉時代最後の「つれづれ草」に至る、百何十年かの歴史が辿った文化の歩みである。「つれづれ草」の著者は、「つれづれ草」文学において、「方丈記」の著者のような無常観に出発しながら、この歴史的発展を表現し得ている。<sup>14)</sup>

「徒然草」の無常観は、世相を客体化し、そこに見出した無常にどう処するかを考えた思想と言ふべきものである。これは、鎌倉という変転と刺激に満ちた一時代を闊してはじめて生成し得た。

## 4. 高校古文における「伝統的な言語文化」の可能性—無常観の扱いを通して—

### (1) 高校古文での無常観

無常観あるいは無常意識は、高校ではどう扱われているのだろう。「平家物語」を採り上げる教科書は多いが、ここでは、上に見るような質の差が授業の組み立てに反映される可能性を吟味する必要から「徒然草」と「方丈記」に着目する。

「方丈記」と「徒然草」は、表1に見るように「国語総合」または「古典」の全教科書で、いずれかま

たは両方が採られている。

表1「方丈記」「徒然草」採択状況

出版社	教科書名	方丈記	徒然草	
東京書籍	国語総合 (古典編)	0	5	
	新編国語総合	0	4	
	精選国語総合	0	5	
	新編古典B	1	4	
	精選古典B (古文編)	2	4	
桐原書店	探究国語総合 古典編	0	5	
	国語総合	0	4	
	探究古典B 古文編	2	5	
明治書院	精選国語総合 [古典編]	0	5	
	高等学校国語総合	0	5	
	精選古典B [古文編]	3	6	
	高等学校古典B	2	4	
第一学習社	高等学校新訂国語総合	0	6	
	高等学校国語総合	0	5	
	高等学校標準国語総合	0	4	
	高等学校新編国語総合	1	2	
	高等学校古典B 古文編	2	5	
	高等学校標準古典B	2	4	
	高等学校標準古典A	2	4	
	数研出版	高等学校国語総合	0	5
	国語総合 古典編	0	8	
古典B	3	3		
三省堂	高等学校国語総合 古典編	0	6	
	精選国語総合	0	5	
	明解国語総合	0	3	
	高等学校古典B 古文編	3	5	
	精選古典B	3	5	
教育出版	国語総合	0	4	
	新編国語総合 言葉の世界へ	0	3	
	古典B 古文編	2	2	
	新編古典B 言葉の世界へ	2	4	
古典文学選 古典A	3	0		
大修館書店	精選国語総合	0	4	
	国語総合 古典編	0	6	
	新編国語総合	0	3	
	新編古典B	1	2	
	古典B 古文編	3	6	
	精選古典B	3	5	
	古典A 物語選	2	5	
筑摩書房	精選国語総合 古典編	1	5	
	国語総合	1	5	
	古典B 古文編	2	6	
右文書院	新編古典	2	9	
	計	48	195	

「方丈記」は、「ゆく河の流れ」で世の無常を訴え、そのあからさまな表れとして大火や飢饉を配置し、「閑居」の安楽で締めくくるという構成になっている。教科書での採択は、「ゆく河の流れ」が19種、「安元の大火」が12種(1種は「辻風」を含む)、「養和の飢饉」が8種、「閑居」が9種である。7種の教科書は三つ段階を全て採り、他は「ゆく河の流れ」と「大火」など無常の例を組み合わせた採択が目立つ。学習者は、長明の言う無常というものが何であるのか、また、彼がどうしてそれを感得したのかを理解するだろう。

「徒然草」の採用は、序、7、10、11、12、19、29、30、31、32、41、45、50、51、52、53、56、

59、68、71、73、75、89、92、109、117、137、150、155、184、185、186、188、189、211、215、229、235、236の39段に及ぶ。序段は17種の教科書に採られて最も多く、以下236段「丹波に出雲と云ふ所あり」(15種)、92段「或人、弓射る事を習ふに」(14種)、137段「花はさかりに」(13種)が続く。低学年は導入として興味深い逸話(53、59段など)が紹介され、高学年ではやや思想的な段(71、73段など)が採られているようだ。

このうち、無常が表出された段は、7段「あだし野の露きゆる時なく」(7種)、30段「人のなきあとばかり」(1種)、41段「五月五日、賀茂の競べ馬を」(2種)、59段「大事を思ひ立たん人は」(1種)、75段「つれづれわぶる人は」(1種)、155段「世に従はん人は」(5種)で、採択段延べ数の10%に満たない。「徒然草」での扱いは、世相の逸話や芸の道、季節の移ろい等が主流であると言ってよい。

137段「花はさかりに」については、「かの棧敷の前をこゝら行き交ふ人の」からの後半部は無常が押し出されてくるものの、長大な段であるからか、有名な前半部を「国語総合」で採る傾向があるようだ。唯一「古典B」で採る東京書籍も、「萬の物、よそながら見る事なし」までである。

つまり、無常観を視点に両作品を比較して読むことのできる教科書は限られる。全教科書の中で「徒然草」の無常に関わる段と「方丈記」の両方を採っているものは表2に示す9種である。

表2「方丈記」と「徒然草」の無常を採るもの

出版社	教科書名	方丈記	徒然草
東京書籍	精選古典b (古文編)	b d	155
桐原書店	探究古典b 古文編	a b+	7
明治書院	精選古典b [古文編]	a c d	7
第一学習社	高等学校古典b 古文編	a b	7
数研出版	古典b	a c d	7
三省堂	高等学校古典b 古文編	a c d	7 155
	精選古典b	a c d	7 155
筑摩書房	古典b 古文編	c d	59
右文書院	新編古典	a b	7 75 155

『方丈記』欄の記号は、a = 「ゆく河の流れ」、b = 「安元の大火」、c = 「養和の飢饉」、d = 「日野山の閑居」を指す。b+は「辻風」を含む。

これらの教科書では、ホームページ上の「指導計画」を見る限り、「方丈記」と「徒然草」を関連づけて扱ってはいない。章段に表出された作者の感じ方や価値観を読み取ることが主眼であって、「方丈記」と「徒然草」を時間の流れの中に置いて比較したり、

背景の違いを意識させようとしたりしてはいない。

三省堂「高等学校古典B 古文編」と「精選古典B」は「隠者の文学」と題するコラムを載せ、武士の台頭や末法思想の影響で価値観がゆらぐ中、西行、長明、兼好といった隠者が現れて文学を担い、その系譜は宗祇、利休、芭蕉らに及んだと指摘し、彼らは世俗を離れることで、「新しい視点や批判的なまなざしを手に入れた<sup>15)</sup>」と説明している。高校生には大変参考になる内容ではある。が、時代背景と連動させての各々の異同については、それが目的ではないので当然のことながら、言い及んではない。

現行の古典教科書（「国語総合」、「古典A」、「古典B」）では、「方丈記」と「徒然草」は、他の作品と同じく「伝統的な言語文化」の理解を促し、併せて自力で古文を読むスキルを養う素材として扱われているのだ。編集の方向としては作者の考え方や時代の思潮へ目を向けさせる面もあるが、結局は採った章段の理解を助ける意図にとどまっている。

## (2) 高校古文の可能性

「古典B」では、読解力や関心をうたった「目標」のもと、「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」という「内容」が設定され、以下の解説がある。

古典には、書き手や文章中の人物の「人間、社会、自然などに対する思想や感情」が、書かれた時代や環境の違いによって、様々に表現されている。そうした思想や感情には、現代にも通じ、生徒からみて共感できるものや、逆に、違和感を覚えたり理解が難しかったりするものもある。また、優れた洞察力や創造性に感動するものなどもある。そのいずれであっても、古典に表れた様々な思想や感情を的確にとらえることは、生徒の「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」ことにつながる。<sup>16)</sup>

基礎科目よりも踏み込んで、古人の思想・感情の理解に立っての感性・思考の陶冶、人生の豊饒化に言及している。ここには、古人と現代人との、共通や相違を含んでの関係が意識されている。複数の古典作品を時間の流れに置いて眺めることで、過去との連続において今をとらえる視野を開かせるような授業の可能性を排除してはいない。

筆者は昭和57年ごろ、「無常観の萌芽—解釈から

鑑賞へ—」という授業を行った。定家、西行、実朝の各一首について、時代背景を踏まえつつ詠歌姿勢を観察し、無常意識を読み取ろうとするものであった。その記憶が本稿の契機になっている。

伝統文化を「かつてこの国にこういう素晴らしいものが存在した」という意味でとらえ、独自性や洗練を誇るといった方向でのみ扱うのは生産的でない。

「かつて」の文化（そして人間）は、現在と繋がっている。歴史はよく似たことの生起消滅が積み重なった螺旋状の時間とも見える。長明の見た世界と約120年後に兼好が至った認識について考えることは、例えば「平和」のとらえ方についての占領期と現在の異同を考える態度を導くだろう。「伝統的な言語文化を尊重する」ことのダイナミズムがここにある。

この稿は、第130回全国大学国語教育学会での発表要旨に基づく。

## 引用文献

- 1) 井村・坂下・橋本・渡瀬：『注釈万葉集《選》』有斐閣新書,180 (1978) \*歌の表記も同書に拠った。
  - 2) 同上書,194
  - 3) 同上書,338-340
  - 4) 窪田章一郎校注：『古今和歌集』角川文庫,341 (1973) \*歌の表記も同書に拠った。
  - 5) 水野弘元：『仏教要語の基礎知識』春秋社,158 (1972)
  - 6) 岩本裕：『日本佛教語辞典』平凡社,1048 (1988)
  - 7) 小林秀雄：『モオツアルト・無常という事』新潮文庫,147, (1961) (初出1942.7「文学界」)
  - 8) 石母田正『平家物語』岩波新書,42-43 (1957) \*「/」は改行を示す。以下同じ。
  - 9) 藤井貞和：『日本文学源流史』青土社,203 (2016)
  - 10) 久保田淳：「徒然草その作者と時代」(『新日本古典文学大系39 方丈記 徒然草』所収)岩波書店,384(1989)
  - 11) 同上
  - 12) 同上書399-400
  - 13) 清水正之：『日本思想全史』ちくま新書,164 (2014)
  - 14) 西尾実：『西尾実国語教育全集第九巻』教育出版,184-185(1976)
  - 15) 中渚正堯・岩崎昇一他：『精選古典B』三省堂,34 (2014)
  - 16) 文部科学省：「高等学校学習指導要領解説 国語編」教育出版,74 (2010)
- 注 「方丈記」「徒然草」本文の表記は、「日本古典文学大系」に拠った。